

令和7年度 自己評価及び学校関係者評価 報告書

岐阜県立岐阜聾学校

学校番号

102

<p>学校教育目標</p>	<p>○聴覚に障がいのある幼児児童生徒一人一人の可能性を最大限に伸ばし、自立と社会参加ができるよう、「生きる力」を育む。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニケーション能力を身に付け、主体的に学び、判断・行動し、問題を解決できる力を育成する。</li> <li>・健やかな体と自他を尊重する豊かな心を育成する。</li> </ul>
---------------	--

<p>評価する領域・分野</p>	<p>○教育目標・学校評価      ○教育活動・学習指導</p>
------------------	-----------------------------------

<p>現状及びアンケートの結果分析等</p>	<p>○教育目標・学校評価 教育理念となる校訓や教育目標、方針とそれに係る教育活動については一定の評価をいただいた。学校教育活動の根底となる部分であるため、児童生徒、保護者、地域に対して一層の理解が得られるよう努めたい。</p> <p>○教育活動・学習指導 体験的活動を含む学習指導において一定の評価を得ており、児童生徒の学習意欲の喚起に繋がっている。一方、授業の進度調整や個別最適の教材・教具の整備については、一人一人に合った教材・教具の一層の充実と、児童生徒の実態に即した指導力の向上が必要である。</p>
------------------------	---

<p>今年度の具体的かつ明確な重点目標</p>	<p>①個に応じた教育の推進と基礎的・基本的な知識・技能の定着（キャリア教育の推進も含める）</p> <p>②魅力ある授業づくり・学びを深める場の設定（職員の指導力・専門性の向上、4つの部の繋がり（校内）、地域・近隣校との繋がり（校外））</p> <p>③開かれた学校づくり（教育活動がわかる情報の発信）</p>
-------------------------	--

<p>目標の達成に必要な具体的取組</p>	<p>①個に応じた教育の推進と基礎的・基本的な知識・技能の定着について</p> <p>◎幼児児童生徒の教育的ニーズの把握・個別の教育支援計画への反映</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児児童生徒が積極的に学ぼうとする意欲・態度の育成</li> <li>・J.coss、読書力診断テスト、発音明瞭度検査等の結果から、児童生徒の言語力の把握と分析（大学やS Tとの連携）</li> <li>・幼児児童生徒の障がい特性に応じた対応（S T、O T、P Tとの連携）</li> </ul> <p>②魅力ある授業づくり・学びを深める場の設定について</p> <p>◎職員の専門性の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・聴覚障がいに関する研修への参加（集団による学び）</li> <li>・外部講師を招いての授業改善・指導力の向上（直接指導による学び）</li> <li>・手話研修会（職員同士による学び）</li> <li>・友だち会、生徒会からの発信</li> <li>・幼稚部、小学部、中学部、高等部の活動や行事の繋がり機会を設ける</li> <li>・交流籍交流、近隣校、同じ障がい校（聾学校）との交流を通じた学び</li> </ul> <p>③開かれた学校づくりについて</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・理解啓発活動（センター校として）</li> <li>・県内に在籍する、聞こえにくい幼児児童生徒に対する積極的な支援訪問</li> <li>・聴覚障がい者同士のつながりの場を作る</li> <li>・保護者や地域の方との交流の実施（校長とわいわい話そう会、学校見学地域の人材、社会人材の活用）</li> </ul>
-----------------------	---

<p>取組状況・実践内容等</p>	<p><b>①個に応じた教育の推進と基礎的・基本的な知識・技能の定着について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第1回の保護者・本人との懇談会を通して、教育支援計画の内容の確認と教育的ニーズの把握を行った。</li> <li>・キャリア教育の一環として、PTA総会にて保護者を対象にキャリア教育に関する説明を行い、発達段階に応じたキャリア教育の必要性を伝えた。</li> <li>・「Let's try」を学校の合言葉とした。児童生徒の代表が、挑戦したいことを言語化し、始業式・終業式で頑張りたいことや取り組んだことを発表した。</li> <li>・J.coss、読書力診断テスト、発音明瞭度検査等の結果から、児童生徒の言語力の把握と分析（大学・STとの連携）をし、その結果をきこえとことばの支援センターが中心となり、各部の教科指導に反映できるよう職員間で共有を図った。</li> <li>・障がい特性に応じて、外部の専門職員と連携し、体幹の保持や手指の巧緻性へのサポート方法や発音指導などについて助言を受け、幼児児童生徒の基礎的な力の向上に努めた。</li> </ul> <p>（表現活動として年間5回講師を依頼、ST30回・PT15回・OT5回）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちの悩みや思いに寄り添った支援として、スクールカウンセラーと連携した相談活動や、職員の教育相談に対するノウハウを習得する研修を行った。（年間10回予定）</li> </ul>
	<p><b>②魅力ある授業づくり・学びを深める場の設定について</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・校内研修（聴覚障がいに関する研修）への参加（集団による学び）として年間2回の授業公開月間を設け、職員間で授業参観をし、学び合いの機会とした。</li> <li>・外部講師を招いての授業改善と指導力の向上（直接指導による学び）として、専門家を招いて職員研修会を実施した。職員の授業参観を通して、外部講師から指導助言を受け、職員の指導力・専門性の向上に努めた。</li> <li>・指導技術の向上に向けて、手話研修会を実施したり聴覚障害者協会と連携し、手話技術の指導を受けたりして手話力の向上を図った。</li> <li>・市幼研(3回)、市教研(3回)に参加し、特別支援学校とは異なる校種の取組を参観したり実践交流をしたりして、当校の授業改善に生かした。</li> <li>・コア・ティーチャー養成教員が、自己の研修テーマに沿った学びを通して新しい取組や情報を職員に還元し、教員の専門性の底上げを図った。</li> <li>・幼稚部から高等部まで縦の繋がりを生かし、生徒会を中心に前期2回、後期2回（予定）「みんなでわいわい遊ぼう会」を行い、縦のつながりや先輩と関わる場を計画した。活動を通して、幼少児にとっては聴覚障がいのあるモデルから学ぶ良い機会となり、先輩生徒は、人との関わり方を学ぶ機会ともなり、子ども同士が繋がる場となった。</li> <li>・毎週金曜日に加納幼稚園交流、年間2回の加納小学校交流、加納中学校生徒会と当校中学部生徒とのあいさつ運動、高等部生徒と老人ホームとの交流を行った。</li> </ul>
	<p><b>③開かれた学校づくりについて</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児児童生徒への直接支援や職員や児童生徒へのきこえに関わる啓発学習等、前期で述べ21件きこえとことばの支援センターに依頼があった。</li> <li>・前期4回実施の地域手話講座には、合計169名の参加があり、手話に対する関心の高さを感じた。</li> <li>・中学部のキャリア教育の一環として、棚原様を講師としてお招きし、進路</li> </ul>

	講演を行ったことにより、生徒たちのキャリアプランに関わる意識を高めることに繋がった。 ・PTA主催の「校長とわいわい話そう会」では、保護者が日頃抱えている悩みを聞くとともに、改善案を話し合ったり、学校への要望を直接聞けたりするなど、保護者との関係構築と学校運営に役立った。	
	評価の視点	評価
①個に応じた教育の推進と基礎的・基本的な知識・技能の定着ができたか。		A (B) C D
②魅力ある授業づくり・学びを深める場の設定ができたか。		(A) B C D
③開かれた学校づくりについて推進できたか。		A (B) C D
	成果・課題	総合評価
①個に応じた教育の推進と基礎的・基本的な知識・技能の定着 ○個別の教育支援計画の効果的な活用と外部専門職員との連携を進めることができ、障がい特性に応じた支援を安定的に実施することができた。 ▲基礎的・基本的な知識・技能の定着には、継続した取組とその取組が効果的であるかどうかの検証を繰り返し行う必要がある。 (実態把握の方法、学習活動の設計の仕方、フォローアップ等)		A (B) C D
②魅力ある授業づくり・学びを深める場の設定 ○授業改善に向けた様々な取組や研修への積極的な参加により、授業力や専門性、教員のコミュニケーションの向上が見られた。 ▲授業公開や各研修後のフィードバックを高めるために、次段階へのステップアップに繋がる振り返りや評価を展開できる仕組みが必要である。		
③開かれた学校づくり ○地域との連携を深めると共に、手話への関心を高め、聴覚障がいに対する理解を広げることができた。 ▲地域連携の継続と共に、どのように発展させるべきかを検討し実践に向けた準備をする必要がある。		
来年度に向けての改善方策案	・授業改善に向けた取組のうち、授業公開や研修後の振り返りと改善の充実を図る。 ・地域や関係機関との連携を広く展開するために、教育活動の情報発信を工夫し、各連携の継続と深化に努める。	

#### 学校関係者評価（令和8年1月16日実施）

意見・要望・評価等
①聾学校の役割について 抽象的な語の理解支援、聞こえないことの説明方法、困りごとの自覚と発信など、聴覚障がいを軸にした教育の原点に立ち戻る必要がある。聾学校から地域に向けて積極的に情報発信してほしい。
②キャリア教育について キャリア教育の一環として地域で働く人との関わりをもつことで得られる学びは大きい。充実させたい。
③企業との連携・役割 企業として聾学校にどのように貢献できるか検討したいとの前向きなご意見をいただいた。「岐阜で働きたい」という生徒のために働きやすい地域環境づくりが重要との認識を示された。工場見学などの要望があれば応え、社会貢献として協力していく意向が示された。